漢詩神奈川

第　38　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-3045

発行人　香取和之
編集人　久川憲四郎

神漢連創立二十周年を迎えて

神奈川県漢詩連盟会長　香取 和之

香取和之会長

皆様、新年明けましておめでとうございます。お正月はいかがお過ごしでしたか。

中国の「貞観政要」という書物に、有名な語句として「創業と守成いずれが難きや」（新たに事業を興すこと（創業）と、出来上がった事業を守り発展させていくこと（守成）のどちらが難しいか）があります。神漢連は本年十月に創立二十周年を迎え、今や明らかに「守成」の世代です。本年は、「どのように、神漢連の理念を守り発展させていくか」について、全会員が考えて、決意を新たにする年だと思っております。

創立二十周年記念行事の計画詳細については、東島事務局次長のもと「企画委員会」で検討中ですが、下記の三項目の実施は既に決まっております。

一．神奈川清韻第四集の発刊…二〇二一年度の第三集発行以来五年ぶりの発刊となりますが、この間、会員の皆様は作詩の研鑽を積まれてきたと思います。思い出に残る漢詩、是非とも記録に留めておきたい漢詩を投稿ください。投稿要領は、漢詩サークル所属員には、サークル代表を通して昨年十月に連絡済みですが、本会報の郵送に同封して神漢連全会員に通知します。尚、編集委員長は玉井幸久先生にお願いしております。

二．神漢連二十周年史の編纂…十周年史の編纂以来、十年ぶりとなります。神漢連では創立十周年以降に入会した会員が既に凡そ半数を占めており、この十年間の活動記録と活動趣旨を会員に分かり易く伝えることが重要になっています。そして、神漢連の良き伝統が次の世代に伝わり、新たな活力をもって更なる展開が図られることを願っております。

三．神漢連創立二十周年記念式典…本年十月十三日（火）に横浜市開港記念会館で開催を予定しています。是非多くの方々に参加願います。合わせて、自詠自書展、全漢詩連会長の鷲野正明先生による記念講演などを計画しています。

今年の神漢連の活動としては、例年通り四・五月に第二十期の「漢詩入門講座」を開催し、新たな会員を迎え入れ、有志で同期の漢詩サークルを発足させる予定です。尚、漢詩入門講座終了後にさらに漢詩鑑賞に注力されたい方々には、「漢詩鑑賞入門講座」（通称、鑑賞会D）を昨年から用意しています。

また、各漢詩サークルでの作詩・批正、鑑賞会ABC・霧笛女子会・大簡会・講演会での漢詩鑑賞、オンラインでの吟行会、漢詩研修会、更に神辞会、自詠自書の会などを予定通り実施していきます。

ところで、着実に漢詩を学ぶ方策を明確化して、会員のレベルアップを図ることは常に重要な課題ですが、半年前の会報三十七号一面に記した方針を、今年も継続して推進していきます。今年も漢詩の鑑賞や創作を通して自己研鑽を積み、また漢詩の仲間との交流を通して豊かな人生を送りましょう。

神漢連創立二十周年を迎えて
記念行事を実施します

神奈川県漢詩連盟（神漢連）は、平成十八（二〇〇六）年十月十四日に創立された。本年創立二十周年を迎えることとなる。

神漢連では、創立二十周年を祝して、各種の記念行事を行うこととし、今後計画を具体化していくが、現在までに決まっている事項とこれから決定する事項等を、以下に記していくこととする。

一．創立記念式典、記念講演、懇親会の開催

一）本年十月十三日(火)に、横浜市中区の横浜市開港記念会館講堂において、記念式典および全日本漢詩連盟の鷲野正明会長による記念講演を開催する。

二）同日夕刻には、鷲野会長ほかの出席を得て、会員による懇親会（会場未定）を行う予定。

二．各種記念行事の実施の概要

一）**「二十周年記念行事企画委員会」**を立ち上げて、実施する行事内容の検討、計画を進める。同委員会の委員長は東島正樹氏、副委員長は吉池純氏、事務局として佐野輝美氏

委員会のメンバー（五十音順）は、牛山知彦、内山早奈江、北野ますみ、木村孝、五嶋美代子、高田宗治、高橋純子、蔦清昭、橋本孝一、松田奈月、宮代まゆみ、山口幸雄の各氏。

委員会はひと月乃至ふた月に一度開催する。記念事業の検討、計画に当たっては、神漢連事務局と連携して進めることとしている。

二）**神漢連会報「漢詩神奈川」特別号（第四十号）**として、「二十周年特別号」を発行する。発行時期は、記念式典の際に配付できるように、九月十五日頃を目途とする。

編集にあたるメンバーは、現在のメンバーに数名を加えるが、人選は別途検討する。

内容は編集メンバーで検討することになるが、神漢連発足後二十年間の会の歩みを掲載する。特に十周年以来の出来事や各漢詩大会での入賞の実績などを中心に記載することとなるほか、各サークルの活動を紹介する予定（できれば写真入りとしたい）。

三）**会員の漢詩集「神奈川清韻第四号」**を発行する。編集長：玉井幸久先生、副編集長：中島龍一先生、編集実務取り纏めは牛山知彦氏。

編集委員は、牛山知彦、水城まゆみ、髙津有二、新井治仁、高橋純子、蔦清昭の各氏。

これまで発行した「神奈川清韻」第一集～第三集の実績と今回の第四集計画の比較は別表のとおりであるが、第四集については、これまでと同様にA五判で、オレンジ色の表紙とする。完成後は会員に一冊無料配布する（二冊目以降は有償）。

発行までの日程は、本会報郵送時に投稿のお願い文書「漢詩投稿のお願い」を同封する。投稿締切りは四月三十日（木）、七月末印刷所へ入稿、九月発刊の運びとなる。

投稿の要領については、次のとおりです（前記「漢詩投稿のお願い」から転載）。

（一）投稿詩については、七言絶句を

原則としますが、他の詩型でも可とします。
また、これまでの漢詩大会での入賞作、入選作も可とします。

（二）サークル会員については、指導講師が作品の批正（平仄、和語、漢文法上の修正等）を行ったものを、サークル代表者が纏めて提出下さい。
サークル会員以外の方は、直接事務局に提出をお願いいたします。

（三）提出の様式は自由としますが、編集作業の効率化のため、電子データでの提出をよろしくお願いいたします。勿論、電子データ以外の手書きの提出でも結構です。
尚、難しい詩語の語釈、ルビは適宜よろしくお願いします。

（四）提出された詩稿について、編集委員会で最終検討を行い、必要に応じて批正し、作者本人とご相談の上で訂正していただく事がありますのでご承知おきください。

（五）提出内容は、漢詩の白文、書き下し、作詩の背景・通釈です。

（六）作詩の背景・通釈は、三百字以内でお願いいたします。

また、物故者　や退会者のうち希望する者も対象とすることとしている。

（四）**自詠自書展の開催**
十月十二日(月)と十三日(火)に横浜市開港記念会館の会議室において開催する。代表者は牛山知彦氏。

三、二十周年記念式典までの諸行事とその日程

十月十三日に記念式典ほかの行事を行うことに伴い、諸行事の日程を次のとおりとする予定である。

一）令和八年度定例総会（例年五月開催）は、実開催せず、書面審査で代行する。

二）令和八年度春季漢詩講演会は、六月五日(金)に開催する。場所は横浜市開港記念会館講堂、講師は高芝麻子先生。

三）会報の発行。次回の会報第三十九号は、従来どおり七月十五日に発行する。
前記のように第四十号は、「二十周年特別号（二十周年のあゆみ）」として九月十五日頃に発行する。

神奈川県漢詩連盟漢詩集　［神奈川清韻］

神奈川清韻の編集概況比較　　（敬称略）

	項目	神奈川清韻第一集	神奈川清韻第二集	神奈川清韻第三集	神奈川清韻第四集
1	発行年月	2011年4月	2014年4月	2022年1月	2026年9月
2	大きさ、頁数	A5判 77頁（含神奈川の漢詩18頁）	A5判 120頁	A5判 180頁（含付録24頁）	A5判 150頁
3	寄稿詩藻	88首・詩題自由、1頁に2首（2人分）	103首・詩題自由、1頁1首（含詩の背景）	140首・詩題自由、1頁1首（含詩の背景）	目標150首・詩題・掲載要領は第三集に同じ
4	表紙題字・イラスト	石川芳雲　　田原健一	石川芳雲　　田原健一	石川芳雲　　牛山知彦	石川芳雲　　牛山知彦
4	印刷　製本	（株）大和メディアクリエイティブ	（有）双葉タイプ	（株）大和メディアクリエイティブ	（株）大和メディアクリエイティブ
5	発行部数、料金	400部、14万円	300部？、15万円	400部、18万円	400部、
6	監修	石川忠久　窪寺貫道	窪寺貫道	玉井幸久	ー
7	編集委員長		城田六郎	古田光子	委員長　玉井幸久 副委員長　中島龍一
8	編集委員	田原健一　水城まゆみ　吉岡昭夫	三村公二　中島龍一　吉岡昭夫	香取和之　水城まゆみ　新井治仁 牛山知彦　山口幸雄　蔦清昭	牛山知彦　水城まゆみ　高津有二 新井治仁　高橋純子　蔦清昭
9	神漢連会長	中山清	岡崎滿義	三村公二	香取和之
10	事務局長	田原健一	櫻庭慎吾	高津有二	久川憲四郎

『続・『三国志』の英雄　曹操の思い
ー市川桃子先生講演会ー

令和七年十一月六日（木）横浜市開港記念会館講堂に於いて、明海大学名誉教授の市川桃子先生による**続・『三国志』の英雄　曹操の思い**というタイトルの講演会が開催されました。会場は約百八十名の来場者で盛会でした。

こちらは令和三年の秋に**『三国志』の英雄　曹操の悲哀**というテーマでお話をいただいたその第二回目ということで、心待ちにしていた講演です。

歩出夏門行

まず、前奏曲となる『豔（えん）』から見ていきます。

雲行雨歩　雲に行き雨に歩み
超越九江之皐　九江の皐を超越す
臨觀異同　異同を臨觀し
心意懐猶豫　心意猶予を懐く
不知當復何從　知らず当に何にか従うべし
經過至我碣石　経過して我が碣石に到る
心惆悵我東海　心惆悵たり我が東海

袁尚軍は西方に逃げ中国北部の異民族、烏桓と同盟を組みました。建安十二年五月に曹操は烏桓に遠征し八月に烏桓を落とします。この白狼山の戦いは臣下達に大反対された遠征でした。曹操軍が戻る途中、冬に向かい困難な行軍となりました。大切な部下を失い、後悔の多い遠征だったと、ようやくたどり着いた碣石で渤海を眺めながら沸き起こって来る悲しい気持ちを歌っています。

秋胡行

苦しい戦いが続く中、曹操は次第に老いていきます。この歌は仙人へのあこがれを歌っています。当時の人々は仙界の存在を信じていました。

願登泰華山　願わくは泰華山に登り
神人共遠游　神人と共に遠游せん
願登泰華山　願わくは泰華山に登り
神人共遠游　神人と共に遠游せん

經歴崑崙山　崑崙山を経歴し
到蓬萊　蓬萊に到らん
飄遥八極　八極に飄遥し
與神人俱　神人と俱にせん
思得神藥　神薬を得るを思い
萬歳為期　万歳もて期となさん

歌以言志　歌いて以て志を言わん
願登泰華山　願わくは泰華山に登らんと

泰山も華山も聖なる山。崑崙山は西の果て、蓬萊山は東の果てにある神仙の住む山です。一万年の寿命を得て、天空を自由にかけまわったらどんなに愉快なことでしょう。くり返しが多く良い調子で壮大な遊仙の世界を歌っています。

短歌行

人生ははかないもの。過ぎ去った日が多くなり、天下統一の世は見られぬかもしれぬという思いを歌います。

第一解

對酒當歌　酒に対して当に歌うべし
人生幾何　人生　幾何ぞ
譬如朝露　譬えば朝露の如し
去日苦多　去りし日は苦だ多し

第四解
呦呦鹿鳴　呦呦と鹿は鳴き
食野之苹　野の苹を食らう
我有嘉賓　我に嘉賓有り
鼓瑟吹笙　瑟を鼓して笙を吹かん

第五解
明明如月　明明として月の如し
何時可掇　何れの時にか掇る可けん
憂從中來　憂いは中従り来りて
不可斷絶　断絶す可からず

第七解
月明星稀　月明らかに星稀にして
烏鵲南飛　烏鵲　南に飛ぶ
繞樹三匝　樹を繞り　三たび匝る
何枝可依　何れの枝にか依る可き

第八解
山不厭高　山は高きを厭わず
海不厭深　海は深きを厭わず
周公吐哺　周公　哺を吐きて
天下歸心　天下　心を帰す

第一解では、人生は日が昇るとすぐに乾いてしまうようなはかない朝露のようだと述べています。第四解では、鹿はおいしい草を見つけると独占することなく分け隔てなく皆で草を楽しむ。自分たちも良い客が来た時に心からもてなしたいという思い。第五解では、空にかかる月のようにはっきり見えているのに我が物にできないものがある。欲しいと思っているのに手に入れられないものは何か。人の心、これからの天下統一の事業を託すことが出来る有能な人材がほしかったのです。第七解、月夜に飛んできた鵲がどの枝にとまろうか迷っていると歌います。鵲は遠くから来た旅人、だれを主君にしようかと迷っている様子に例えています。この句は宋・蘇軾の「赤壁の賦」に歌われています。第八解の前半二句は人材を拒絶せずに広く受け入れるという事です。この短歌行からは、曹操の後世の社会をこれからの若者に引き受けてほしいとの願いを感じます。

熱心に聴く会場の皆さん

度関山

曹操が、あるいは天下の人々が理想とする太平の世、これを実現するにはどうするべきなのでしょうか。

侈悪之大　侈るは悪の大
倹爲恭德　倹なるは恭徳爲り
許由推讓　許由推譲す
豈有訟曲　豈に訟曲有らんや
兼愛尚同　兼愛と尚同あらば
疏者爲戚　疏なる者も戚と爲らん

兼愛とは、天下の人々が愛し合えば平和になり、尚同とは天下の意見が天子の意見に統一されれば天下は治まるという考え方です。互いに慈しみあいリーダーが賢く、皆が自分勝手な意見を通そうとしなければ戦争も起こらなくなるだろう。そんな世界を曹操は望んでいました。

最後に

曹操は将軍でもあると同時に中国の文学史上でも有数な詩人でした。その作品には、彼の生きた時代とその時の思いが素直に詠われています。ただ天下を狙っていたわけではなく、思い悩み、傷つき、自分の信じるところを目指し生きていったのでしょう。

講演会の後、聴講者の方々からの質問を受けました。次々と手が挙がり、曹操への関心の高さを目の当たりにしました。
こちらの講演会はYouTubeがございます。是非ご覧ください。

記　高橋純子

オンライン吟行会

「小笠原諸島」（八月三十日開催）

景勝地などに現地集合し、その場で与えられる韻字を用いて一句を詠じ、先生が連句としてまとめられるのが吟行会。実地で感じたことを即興的に一句に落とし込む楽しさを味合うには、ある程度の漢詩経験が必要ですね。

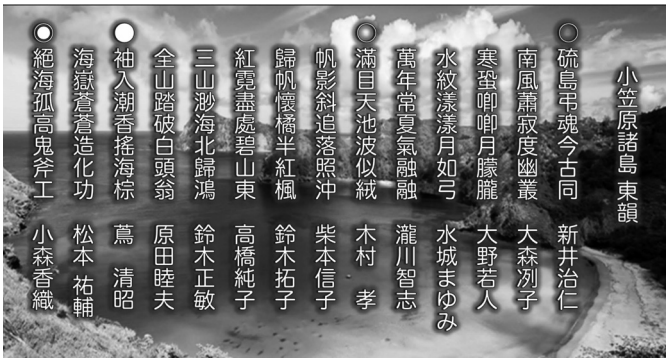
一方、どなたも経験されている、自室で詩語集や辞書、漢詩集を参考に一詩まとめる作業に近いのが、オンライン吟行会の一句投句です。課題韻字を受け取って投句までの期間は四日間、余裕があります。

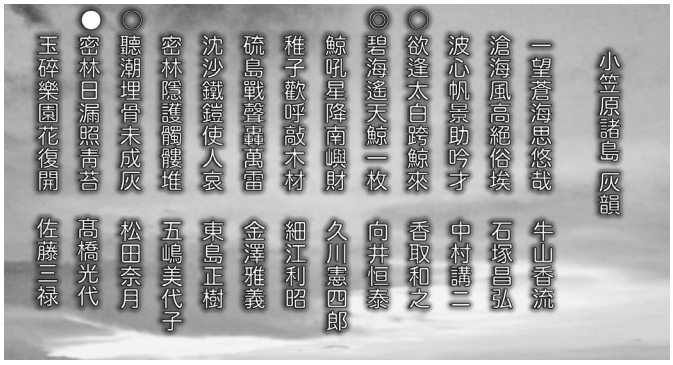
令和七年八月のオンライン吟行会の参加者は、神漢連一期入会の大先輩から十八期入会の新人まで、ほぼ均等な構成でした。自宅に居て参加できること、手持ちの資料を駆使しながら句作りができること、という特徴が反映されていると思います。Ｚｏｏｍで集まって、先生のコメントや大先輩から新人まで全員の苦労話が伺えるのも楽しみの一つです。驚くことに、というと失礼ですが、最近の数回の受賞者に必ず新人が含まれています。受賞者マークの名前から探してみてください。

Ｚｏｏｍ接続など不安な方には世話役がサポートしますので、次回の冬のオンライン吟行会への参加をご検討ください。お問い合わせは筆者まで。

（蔦　清昭）

◎優句　○秀句　●人気句





八月三十日初参加初優句！

いななき会　向井恒泰

初参加でビギナーズラックに恵まれ優句に選ばれました。『**碧海遥天鯨一枚**』です。

漢詩を学び始めて二年、神漢連の漢詩大会や研修会などに漢詩を投稿しても全く箸にも棒にもかからない状態でした。まして初参加のオンライン吟行会ではどう進むのか、どう評価されるのか不安でした。しかし皆様の丁寧なご説明とご指導が非常に分り易く、本当に有難い吟行会でした。更には思いもよらず優句と評価頂き、望外の歓びで、今後の漢詩人生に大いに元気づけられました。

今回は詩題が小笠原諸島、わたしへの指定句末韻字は「盃」又は「枚」。これには参りました！「盃」はお酒の句になりそうで小笠原と無関係。第七字としてあまり使われないであろう「枚」を選ぶも、詩語集や「だれ漢」に句末「枚」という例がない。ただ辞典等を調べると大きな平なもの、例えば波や雲に使う用例がある。ここで昔愚息が船で小笠原へ旅行し大海原を見て感激したと話していた事を思い出しました。見渡す限りの紺碧の海を水平線の彼方を目指して進んでいく船、そこに飛び上がり横飛びする大きな鯨！大波が枚と言えるなら大鯨も枚と考えた次第です。

後の講評で、体言止があるものの情景が目に浮かぶと仰って頂き嬉しく思いました。

当日は皆様素晴らしい句揃いで大変勉強になりました。今後とも宜しくお願いします。

会員の活動

とても覚えきれない　というか思い出せない！

神辞会世話役　蔦　清昭

複雑極まりない言語（日本語）を操って生きてきたけど「平仄？押韻？何これ？」が漢詩創作の最初の躓き。先生は「やっているうちに覚える」と仰る。覚えられないんですね、これが。

指導書や辞書で調べまくってなんとか形にすると「冒韻です」「孤平です」「同字重出です」…修正に修正を重ねて提出すると「七絶にこんなに色々盛り込んではいけません」と、やっと漢詩としてのコメントを頂けることに。

これを作詩の度にやるのはやってられない、と落ち込んでいた時「ＰＣ漢詩情報交換会」がスタート。二〇一七年のことです。「こんなこと、あんなことパソコンで出来たらいいね」との意見交換の後「じゃ、その仕掛け作ろうか」と始まった「神辞会」でした。それから八年、体力・記憶力・判断力が衰え始めた七九歳の今（個人差がありますね）、ＩＴ環境の進化は目覚ましく、漢詩関連の情報も充実しているのはありがたいことです。

ご興味のある方は「神漢連ホームページ」から「神辞会」をクリックして覗いてみて下さい。

年二回Ｚｏｏｍでの定例会（説明会）も実施しています。

十九期サークル「聚鳩会」が発足

代表世話人　北野ますみ

第十九期の会名「聚鳩会（じゅきゅうかい）」は、男女別々のメンバーから提案された「聚」と「鳩」を合わせた会名です。スタートから自然に意気の合った会の誕生となりました。

十六名のメンバーは様々な社会経験を持っており、既に漢詩ではかなりの実力を持っているかたもいらっしゃるようです。これから例会、懇親会等を通じて知り合い、交流を深めていくことをとても楽しみにしています。

例会は偶数月の第四金曜日にかながわ県民センターで開催しています。

講師は高橋純子さん、久川憲四郎さんです。会の発足早々に高橋講師が全日本漢詩大会で文部科学大臣賞を受賞するという吉事が有り、聚鳩会は追い風に乗って始動できました。

メンバーが多いため課題詩の提出も多いですが、例会の時間制限の中でも両講師の的確なご配慮で批正も順調に進行しています。また、毎回両講師の作品披露もあり、学びと楽しみが共存する会となっています。

なお、初代代表世話人の後藤俊男さんがご家庭の事情で退任されたため、私が後任となりました。漢詩も未経験、代表も未経験ですが、メンバー皆さんに助けていただきながら務めてまいります。

どうぞ「聚鳩会」をよろしくお願いいたします。

鑑賞会Ｄのお勧め

鑑賞会Ｄ世話人　佐野輝美

鑑賞会Ｄは漢詩を鑑賞したい方向けに令和七年六月に新設された講座です。講師は大ベテランの中島龍一先生へお願いし、テキストは主に「漢詩鑑賞辞典」を用いて李白・杜甫をはじめとした中国・日本の代表的な詩人の漢詩を対面方式で毎月第一水曜日に石川町駅近くの「かながわ労働プラザ」にて対面方式で、わかりやすく解説頂いております。

また、漢詩創作においては、「知識」を広めることが重要とされています。そのために必要なものとして「語彙」と「典故」がキーワードとなります。中島先生の解説では中国・日本の歴史、地理的な位置づけを中島先生独自作成の資料等で詩を解説いただくことで、「語彙」と「典故」を意識せずとも少しずつ身につけることができます。

講座では毎回基本的に五首を一つずつ解説した後、受講生からの質問を受け付け、それへの回答を行うという形式で進められます。開講当初は緊張のためか、質問も少なかったものの回を重ねるごとに質問も出始め、和気あいあいの雰囲気となってきています。

会員は現在三十名、一九期が二十名、その他が十名の登録となっています。私自身は漢詩創作の一助となればと思い応募したのですが、現在では中島先生の多岐に渡る漢詩の解説をとても楽しみとしています。

漢詩鑑賞へご興味のある方は一度参加願います。

現代中国の漢詩事情（連載）

「元白」コンビの友情が音楽劇に！

逸語会　松田奈月

ミュージカル『夢微之』が、上海の小劇場で三年目のロングランに突入している。白居易が亡き友・元稹を想って作った七言律詩がタイトルになっているように、「元白」とも呼ばれる白居易と元稹の三十年来の友情を描いた物語だ。ともに官吏として出会い、動乱の時代に翻弄されながらも、生涯を通じて九百通以上の手紙のやりとりが続き、固い友情で結ばれる二人。白居易は、不遇の死を遂げた年下の元稹を想い、「夢同遊」と歌い…

「元白」コンビの俳優は日替わり

オリジナルの楽曲で、琵琶や琴の伝統楽器の音色が生かされつつ、ロック調やバラードなど耳に残る全十三曲。歌詞は白居易と元稹の詩から言葉を引用しつつ、オリジナルの歌詞になっているので、耳で聞くだけだとなかなか難解。周りの観客は熱心に聞いているので、さすが漢詩の素養が違うと感心していたのだが、あとでみんな歌詞本などをベースにきちんと予習していることが判明。確かに予習してから臨めば、何倍も何度も楽しめる舞台なのである。出演者は白居易と元稹役しかいない二人舞台。中国で近年人気の没入型の劇場は、舞台の真ん中にも客席が設置され、観客の間を白居易と元稹が縦横無尽に、時には激しく感情をぶつけながら、時に涙しながら、時には着替えながら駆け巡り…、そんな二人の姿を客席の女子たちは目をハートにしながら見守っているのである。

没入型の劇場は距離が近い

ロングランとなっている人気の秘密は、白居易×元稹のキャストの組み合わせが何パターンもあり、上演ごとに入れ替わること。若手の実力派俳優や、オーディション番組などから人気が出始めた新人歌手などのミュージカルへの登竜門となっているのだ。毎週のように通い詰めているファンたちの見る目はシビアで、誰と誰のペアがよかったかSNSで採点が行われている。その中で、漢詩をベースとした歌詞をいかに正確にかつ感情を込めて歌えるかも重要な採点基準になっているのである。

さて、ニッチなファン層を形成しながら長期上演を続けている『夢微之』だが、なんと二〇二五年秋に、上海で日本人役者（演出兼白居易・良知真次さん×元稹・新里宏太さん）による日本語での上演が行われた。同じ楽曲を日本語歌詞で歌うため、中国語からはかなり要素が絞り込まれた現代語訳になっている。たとえば中国語では「相携手 夢同遊」が翻訳では「夢が覚めれば」となっているような具合である。

観客の目に映る白居易はこんな感じ？

残念ながら日本語上演の回は見られなかったのだが、ファンの評判は上々で、すでにストーリー展開も歌も熟知している（でも日本語は分からない！）古参ファンにも、作品の新たな魅力が広がったと好評だ。ファンたちが歌詞の日中対訳をネットにアップするなど熱量が伝わってくる。近々、日本での日本語版上演が行われる予定だとか。私としては、日本語版と合わせて、ぜひ中国語でのオリジナル版での上演も日本で行い、中国の旬のイケメンたちが繰り広げる唐代の胸アツの友情物語に、日本の女子たちがときめいてほしいと願うのである。

漢詩大会で神漢連会員活躍

全日本漢詩大会徳島大会

文部科学大臣賞

高橋純子

吐魯蕃旅亭

蓁蓁緑葉繞旗亭
映日葡萄滿架馨
繡帽胡童笑迎處
明眸秋果兩深青

吐魯蕃旅亭

蓁蓁（しんしん）たる緑葉　旗亭を繞り
日に映ず葡萄　架に満ちて馨し
繡帽（しうぼう）の胡童（こどう）　笑ひて迎ふる処
明眸（めいぼう）　秋果　両（ふた）つながら深青

人生の豊かさ

漢詩を始めて日々が豊かになったと感じています。四季のうつろいによる自然のわずかな変化に気づくようになったこと。漢詩の知識を得ることも楽しく、新たな友に出会う喜びも味わうことができました。

この詩を作るにあたり、四十年程前の両親との中国旅行を振り返る時間はとても幸せでした。この時間を与えてくれたのも漢詩なのだと思うと、漢詩にはこんな力もあるのかと驚いたのです。今年は今までと違った人生の豊かさを知ることとなりました。

この度は名誉ある賞をいただき大変嬉しく思います。日頃よりご指導いただいている先生、神漢連の先輩方にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。永い漢詩の道はまだ始まったばかりです。これからも精進してまいります。

徳島市教育委員会教育長賞

杉森千枝美

采摘枇杷

枇杷黄熟正離離
攀樹尤欣未覺衰
不意筠籠傾瀉處
金丸散落駭羣兒

枇杷を采摘す

枇杷　黄熟して　正に離離たり
樹を攀（よ）ぢて尤（もっとも）欣ぶ未だ衰へを覚えざるを
不意に　筠籠（いんろう）　傾瀉（けいしゃ）する処
金丸散落して群児を駭（おどろ）かすとは

端無くも

私の漢詩作りは、韻と平仄を合わせる漢字パズルそのもの。何かを詠いたい境地には未だ至らず、募集の締切りに間に合わせている。ぴったりあてはまる言葉を捜すのは、多くの人に愛されて残っている詩の、言葉の海で一本釣りをするのに似ている。犬も歩けば棒に当たる、先人の詩にあたらなければ、いい言葉に出合えない。私の中から湧いてくることはない。「この言葉、使ってみたいな」という、「好物」を求めて、犬のように鼻をひくつかせて、言葉の海をさまよい歩く。この度、端無くも賞をいただけた。「無端」、これも賈島の「渡桑乾」で出合ってから、いつかは漢詩で使ってみたい言葉の一つだ。

四国漢詩連盟会長賞

木村孝

郷校枳籬

春日枳花迎我開
清芬馥郁學堂隈
舊秋同摘黄金實
追憶籬邊胡蝶回

郷校の枳籬（きり）

春日　枳花　我を迎えて開く
清芬　馥郁たり　学童の隈
旧秋　同（とも）に摘みし　黄金の実
籬辺に追憶すれば　胡蝶回る

母校のカラタチの思い出

今回のテーマ「果樹」は甚だなじみの薄い分野で何を対象にしたら良いのか苦労しました。そんな中で思いついたのが高校の垣根の一角にあったカラタチでした。春の白い花、秋の実、そこにやってくる蝶をまとめようという試みです。春に帰郷した際に立ち寄った母校、そこで出迎えてくれた花、秋の実は過去の回想としました。最後まで悩んだのが蝶をどうするか。結果的には結句下三字を「胡蝶回」としたのですが、この蝶の登場が唐突とされるか、或は必然と見てもらえるか。自信のないままの投稿でしたが、幸いにも素晴らしい賞をいただけることになり安心しました。これを励みに一層努力してまいります。

入選

山蹊橘柚

漫歩寒山樵徑長
風來忽覺一林香
行看橘柚已成熟
無數金黄媚夕陽

岡嶋宣昭

山蹊の橘柚

漫（そぞ）ろに歩く寒山　樵徑（しょうけい）長し
風来りて忽ち覚ゆ一林の香しきを
行ゆく看る　橘柚已に成熟し
無数の金黄の夕陽に媚ぶるを

小嶋明紀子

秋興

停筇山路紫苔侵
露濕野花香染襟
一陣鳴鴉來去處
黄梨紅柿滿空林

秋興

筇を山路に停むれば　紫苔侵す
露は野花を湿おして香襟を染む
一陣の鳴鴉　来去する処
黄梨　紅柿　空林に満つ

山口幸雄

房州初夏

枇杷黄熟葉青青
李子紅粧落小庭
植樹開荒廿餘載
雨晴風爽滿園馨

房州初夏

枇杷　黄熟して　葉　青青たり
李子　紅粧して小庭に落つ
樹を植え荒を開くこと廿余載
雨晴るれば風爽やかにして満園馨る

第十回漱石記念漢詩大会

優秀賞

過阿蘇草千里　横溝喜久男

遙望蘇嶽上噴煙
曠野青青草色鮮
人馬悠然戯池畔
快風吹度白雲天

阿蘇草千里を過る

遥かに望めば蘇岳噴煙を上げ
曠野青々　草色鮮やかなり
人馬悠然として池畔に戯れ
快風吹き度る　白雲の天

■神奈川県漢詩連盟の会員　犬飼堯様は、令和七年八月二十日に逝去されました。（享年八十二）
ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

佳作

雨後春望　岡嶋宣昭

雨歇城南春氣加
東風麥隴長新芽
翩翩相趁雙胡蝶
忽入小畦黃菜花

雨後の春望

雨歇む城南　春気加わり
東風麥隴　新芽を長ず
翩翩相趁う　双胡蝶
忽ち入る小畦　黄菜花

寄合歡花　金澤武司郎

雨過園林炎暑衰
合歡花絳帶煙披
蕉翁往昔比西施
踏露裁來贈所思

合歡の花を寄す

雨過ぎて園林　炎暑衰え
合歡の花絳く　煙を帯び披く
蕉翁往昔　西施に比す
露を踏み裁ち来りて思う所に贈らん

雨夜懷良人　木村　孝

空房半夜雨聲深
床下蕭條促織吟
長路客中無恙否
一聽松韻又停針

雨夜良人を懐う

空房半夜　雨声深し
床下蕭条　促織吟ず
長路の客中　恙なしや否や
一たび松韻を聴きて又針を停む

山寺初夏　平賀康雄

積翠層巒曉露鮮
簷鈴響谷澗聲連
老僧不識塵寰事
獨坐苔階調素絃

山寺初夏

積翠層巒　曉露鮮やかなり
簷鈴谷に響き　澗声連なる
老僧識らず　塵寰の事
独り苔階に坐し素絃を調う

禪院看花　高橋純子

曉靄濛濛殘月垂
幽庭曳杖到清池
無風依約微香動
一朶白蓮花綻時

禅院看花

暁靄濛濛　残月垂る
幽庭杖を曳きて清池に到る
風無きに依約として微香動く
一朶の白蓮　花　綻ぶの時

秋夜舟遊　岡嶋宣昭

西風暮雨坐來收
渺渺大江涵月流
十里水天銀一色
空明入棹作清遊

秋夜舟遊

西風暮雨　坐来に収まり
渺渺たる大江　月を涵して流る
十里の水天　銀一色
空明に棹を入れて清遊を作す

生還　金澤武司郎

敗歸獨自佇沙汀
塗土軍靴想友朋
時聽犬吠村里晚
柳陰隱見我家燈

生還

敗れて帰り独り自ら沙汀に佇む
土に塗る軍靴　友朋を想う
時に犬吠を聴く　村里の晩
柳陰に隠見す　我が家の灯

甲州途次　仁上恵子

葡萄多彩路傍園
枝上如垂萬顆繁
客子極歡含美玉
酒人乘興醉芳樽

甲州途次

葡萄多彩なる路傍の園
枝上垂るるが如く萬顆繁し
客子歓を極めて美玉を含み
酒人興に乗じて芳樽に酔う

第十七回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞諸橋轍次賞

岡嶋宣昭

雪徑款冬
侵寒遠訪野翁家
曳杖村郊雪徑斜
門巷鋪銀人不見
款冬纔發一株花

雪径の款冬（くわんとう）
寒を侵して遠く訪ふ　野翁の家
杖を村郊に曳けば雪径斜めなり
門巷銀を鋪きて人見えず
款冬纔（わづ）かに発（ひら）く　一株の花

青天の霹靂

九詩期会の詩友が、昨年、この大会で優秀賞や佳作を獲得していること、累積作詩数が目標に到達したことなどから、チャレンジをしてみたら、まさかの「最優秀賞」に選出された。詩力不相応の受賞に嬉しさ一分、戸惑い九分である。でも十年目の区切りにはとても素晴らしい記念となった。

趣向はもとより、詩題との整合性、リズム、立体感などを具体的に詩に落とすというのは初学者には生易しい作業ではない。適切な水先案内人がどうしても必要である。この詩も例外ではなく、諸先生方にご指導を頂いた成果物である。大感謝！漢詩の神様の「これからも頑張れよ」との思し召しだと信じて、この大きな賞に恥じない詩力の形成を目指して努力しよう、と思っている。

優秀賞

郊居夜雪
北風凛凛雪縱横
寒氣侵衾眠不成
起坐燈前閒暖酒
微聞六出濯窗聲

郊居の夜雪
北風凛凛として　雪　縱横たり
寒気衾（きん）を侵して　眠り成らず
起坐して灯前閑に酒を暖むれば
微かに聞く六出（りくしゅつ）の窓を濯（あら）ふの声を

岡嶋宣昭

秀作

名苑探春
畫橋香殿凍風回
騒客衝寒獨自來
玉屑霏霏埋屐處
眞紅梅朶百花魁

名苑春を探る
画橋　香殿　凍風回る
騒客寒を衝きて独り自ら来たる
玉屑霏霏として　屐（げき）を埋むる処
真紅の梅朶（ばいだ）　百花の魁なり

小嶋明紀子

佳作

除夕
今宵長幼集燈前
瓶菊酒香殘臘天
一醉解頤追往事
滿窗風雪寺鐘傳

除夕（ぢょせき）
今宵　長幼　灯前に集い
瓶菊　酒は香ばし殘臘（ざんろう）の天
一酔頤（おとがい）を解きて往事を追へば
満窓の風雪　寺鐘伝はる

青山正子

晚秋山寺
楓澗淙淙寒意生
連峯冠雪十分晴
暮鐘一杵寺門裏
歸鳥兩三天路行

晚秋の山寺
楓澗淙淙（そうそう）として　寒意生じ
連峰雪を冠して　十分に晴る
暮鐘　一杵（いっしょ）　寺門の裏
帰鳥　兩三　天路に行く

鈴木潔州

九日登高
晴川重嶺遠分明
歸鳥飛雲傷客情
黃菊插頭空馥郁
瘦肩衰鬢戀尊羹

九日登高
晴川　重嶺　遠く分明なり
帰鳥　飛雲　客情を傷ましむ
黄菊頭に挿せば空しく馥郁たり
瘦肩　衰鬢（すいびん）　尊羹（じゅんかう）を恋ふ

小嶋明紀子

第二十八回全国ふるさと漢詩コンテスト

入賞

山寺孟蘭盆
松柏蕭然月色清
村民舞踊樂浮生
三更院落人歸後
時聽山中佛法聲

山寺孟蘭盆
松柏蕭然として月色清
村民舞い踊り浮生を楽しむ
三更の院落　人帰るの後
時に聴く山中　仏法の声

金澤武司郎

令和七年度特別史跡旧閑谷学校釈菜

入賞

訪閑谷學黌
衆庶修論山靜陲
紅黃楷樹報秋期
仰看聖廟夕陽裏
口誦學而時習之

訪閑谷學黌
衆庶論を修する　山静かなる陲
紅黄の楷樹　秋を報ずるの期
仰ぎ看る聖廟　夕陽の裏
口誦す学びて時に之を習ふと

金澤武司郎

神奈川県漢詩連盟 令和八年の行事予定

カレンダーに予定を記入しましょう

●神漢連創立二十周年記念行事（詳細は二面・三面参照）

記念式典・記念講演会　十月十三日（火）
横浜市開港記念会館（横浜市中区本町一丁目六番地）
講演会　鷲野正明先生

●漢詩入門講座

漢詩の鑑賞と実作（全五回の講義と実習、第二十期生）
漢詩に関心のあるお知り合いに声をかけてください。
期日・時間　①四月八日（水）　②四月十五日（水）　③四月二十二日（水）
④五月十三日（水）　⑤五月二十七日（水）　午後一時三十分～四時
場　所　神奈川近代文学館（横浜市中区山手町一一〇）
講　師　香取会長ほか　連盟の役員
問合せ・受講申し込み
〒221-0001　横浜市神奈川区西寺尾一―六―四　新井治仁
TEL/FAX　045-432-5438　Mail：haruhitoarai@hotmail.co.jp

●漢詩講演会

日　時　六月五日（金）　午後二時～四時
場　所　横浜市開港記念会館　　参加申込は不要です。
講演者　高芝麻子先生
演　題　「杜甫と家族　日常を愛し日常を詠う（仮）」
（※）本年は、会場での総会の開催はありません。

●オンライン吟行会

期　日　二月二十三日（月・祝）　午後一時三十分～
開催日が近づいた頃メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

編集後記

昨年は十月の全日本漢詩大会徳島大会で、高橋純子さんが栄えある文部科学大臣賞を受賞されるという大朗報がありました。神漢連としては三人目の同賞受賞で、一緒に編集を担当している者としてこの上ない喜びです。

今号でも、漢詩講演会の纏めと各漢詩大会での入賞作の纏めなどの込み入ったページを担当していただいています。

午年の特徴は、情熱とエネルギーに満ち、物事が勢いよく進展するのだそうです。しかも十干は丙で、丙午は新しい挑戦に光が差して、前進する力強さを感じられる年だそう。

このような年に、神漢連が創立二十周年の節目を迎えることになりますが、前を向いて会の活動が一層充実していくようにしていきたいものです。

五年ごとに記念行事をしていると間断なくやっているような感じですが、大事な節目ですので、皆さんのお知恵を借りながら、記録だけではなく、記憶に残るようなことができたらよいと思っています。

市川桃子先生による曹操の講演は、盛況で好評でした。個人的には「歩出夏門行」にある「老驥伏櫪　志在千里　老驥櫪に伏するも志は千里に在り」が好きな言葉で、昨年は会社を退職する後輩に色紙に書いて贈りました。

（東島正樹）